

飲酒欲求を抑える新薬に加え、節酒も選択肢に

アルコール依存症

アルコールいぞんしょう

自分で酒の飲み方をコントロールできなくなるアルコール依存症。薬物治療はこれまでアルコールに嫌悪感を抱かせる薬のみだったが、飲酒欲求自体を抑える新薬が登場。さらに断酒が原則だった治療に、酒を控える「節酒」での治療法も試みられている。

東京都に住む、西村賢司さん(仮名・39歳)は、23歳でテレビ番組の制作会社にADとして就職し、元々付き合いで飲む程度だった酒量が仕事のストレスや不規則な生活から増えた。プロデューサーになった35歳のころから、酒量は更に増えた。2年前、仕事中に突然吐血し、総合病院に運び込まれそのまま入院。肝硬変からくる食道静脈瘤破裂だった。治療した医師は、アルコールが病気の原因と考え、治療後に、アルコール治療の専門病院である久里浜医療センターを紹介。西村さんはそこでアルコール依存症と診断された。

「アルコール依存症は、以前は中年男性の病気でされていましたが、近年は社会環境や生活習慣の変化により高齢者や女性の患者が増え、うちを訪れる患者さんの約半数を占めています」。久里浜医療センター院長の樋口進医師はそう話す。アルコール依存症の治療は「断酒」、つまり一生お酒を飲まないことが基本となる。そのためには患者本人の意志が何よりも重要で、その意志を継続させるために心理社会的治療と薬物療法を併用して行う。

心理社会的治療は、大きく三つ。一つめは教育だ。アルコール依存症の特徴は、本人が自分がアルコールに依存しているという事実を認められないことにある。そのため、まずは、アルコール依存症という病気を理解し、自分が依存症であることを把握させる。二つめは患者たちを集めて行う認知行動療法。なぜ入院するに至ったのか、立ち直るためにどうしたらいいのかを本人に考えてもらい、患者同士意見を話し合う。三つめは個々に対するカウンセリングだ。この三つを繰り返して、患者自身に断酒を決心させ、実行させる。

心理社会的治療は症状の重症度によって入院、外来のいずれかで行う。西村さんの場合は食道静脈瘤破裂の治療で断酒できていたため、外来で通院しながら、日常生活を送るための認知行動療法、カウンセリングなどの治療を受けた。一方、断酒を継続させるために薬物治療が併用される。従来は「抗酒薬」と呼ばれるものが使われてきた。一口酒を飲むだけで悪酔いを引き起こす働きにより、酒に対する嫌悪感を抱かせ、飲酒を予防する薬だ。しかし抗酒薬は副作用が出やすく、心臓や肝臓に問題を抱えている人は使用できない。また、患者自身も副作用の強さから怖がって飲みたがらない人が多かった。

飲酒欲求を抑える断酒補助薬が登場

これに対し、2013年5月、飲酒欲求そのものを抑える断酒補助薬「レグテクト(一般名・アカンプロサートカルシウム)」が登場した。アルコール依存症になると、脳の興奮に関係するグルタミン酸神経の活動が高まり、飲酒欲求を高める。レグテクトはその神経の働きにブレーキをかける薬だ。抗酒薬とは異なり、



独立行政法人国立病院機構 久里浜医療センター院長 樋口 進 医師

副作用も少ないため、ほぼ全ての患者に使用できるという利点がある。

西村さんも、外来での治療が始まったのと同時にレグテクトの服用を開始。それから5カ月後、西村さんは無事に社会復帰を果たし、断酒も継続している。

ただ、レグテクトは1日3回服用する必要があるため、断酒への強い意志と規則正しい生活が必要になる。また、飲酒欲求は脳内のさまざまな神経伝達物質が関係しており、レグテクトが働くのはそのうちのひとつだ。そのため「レグテクト単体

での効果はまだ限定的だ」と樋口医師は言う。

「レグテクトの登場によって、アルコール依存症の薬物治療は新たな一歩を踏み出しました。アルコール依存症はいくつもの神経伝達物質が関係した病気なので、そのおのおのに対して薬物が出てくることによって、治療の方法は進展していくと思います」(樋口医師)

さらに今後、脳内報酬系と呼ばれる、心地よさに関係する神経系の一つオピオイド神経に作用し、飲酒欲求を下げる「ナルメフェン」という薬の臨床試験が行わ

れる予定だという。

「ナルメフェンは、飲酒前に服用することで、飲酒によって得られる『心地よさ』を遮断し、多量の飲酒を防ぐ作用があります。これまでのアルコール依存症の治療は断酒が基本でしたが、この薬が承認されることで、この薬が承認されることで、アルコール依存の重症度が軽い人の場合には、断酒ではなく飲酒量低減による治療が可能になるかもしれません」(同)

今後、日本においてより効果的なアルコール依存症治療を進めるためにも、新薬の開発・承認が急がれる。

■アルコール依存症の診断基準

次のうち3つ以上当てはまれば、アルコール依存症の恐れがあります

- お酒を飲めない状況でも強い飲酒欲求を感じた
- 自分の意思に反してお酒を飲みはじめ、予定より長時間または多量に飲み続けた
- お酒を飲む量を減らしたり、やめたときに、手が震える、汗をかく、眠れないなどの症状が出た
- 飲酒を続けることで、お酒に強くなった
- 飲酒のために仕事やつきあいなど大切なことをあきらめた
- お酒の飲みすぎによる体や心の病気がありながら、お酒を飲み続けた

WHOによる診断ガイドライン(ICD-10)を編集部で改変

アルコール依存症データ

推定患者数	約80万人(2003年)
かかりやすい性別	男女比4対1
かかりやすい年代	男性は50代半ば、女性は40代半ばが多い
主な診療科	精神科
主な症状	アルコール性肝障害・慢性膵炎・糖尿病・脳萎縮・脳梗塞・脳出血・うつ病
標準治療	・心理社会的治療(教育、認知行動療法、カウンセリング) ・身体依存がある場合、離脱症状に対する薬物治療